

マハーラクシュミーと真の知識の願い事 インドの古典物語に基づいて

約 700 年前のこと、南インドのカルナタカで、マーダヴァとして知られる頭脳明晰(めいせき)な若いブラーミンが、王様の評議会の一員となりました。マーダヴァは雄弁で、何をいつ言うべきかを完璧にわきまえ、すぐに王の大のお気に入りになりました。

マーダヴァは人々から注目されて、ますます力量を発揮しました。彼が発言する時はいつでも、古参の評議員たちは、この若者が何を言うかを聞こうと静かになりました。マーダヴァはさらに、王の側近としての豪華な生活も楽しみました。柔らかなベッド、豊かな食べ物、優雅な人々との交流は、彼にとって初めての体験でした。

しかしながら、マーダヴァは自らの幸運に満足してはいませんでした。彼はもっと多くを望みました。すべてについて、より多くを望んだのです！ マーダヴァは最高の絹で作られた服とターバンを欲しました。彼はダイヤとエメラルドとルビーが付いた金の指輪を欲しました。王宮内のあらゆる秘密や、王を陥れるような企てのすべてを前もって知らせてくれるようなスパイを雇いたいと思いました。彼は自分が、マーダヴァという男が、常に王様のお気に入りの評議員であるように、王様に他とは違うまれな贈り物を買いたかったのです。

マーダヴァはこれらすべてを成し遂げるには、多大な富が必要だと理解していました。そしてこの難題について、長い間、深く考えました。

ある朝、彼に素晴らしいアイデアが湧きました。彼が望む富を得るためにラクシュミーに祈ることでした。マーダヴァは、ラクシュミーに全身全霊で祈ることで、必ずや富の女神が自分に報いてくれるだろう、しかもたんまりと、と心に思いました。

まさにその当日、マーダヴァは金貸しの所に行き、何千ルピーものお金を借りました。彼は自分の背丈よりも高いビャクダンでできた美しいシュリー・ラクシュミーのムールティ、つまり彫像を買い求めたのです。彼はまた、この彫像を正しく崇拝するために、高価なビャクダンのオイル、白いジャスミンの花輪、刺しゅうが施された絹布、金色のアーラティー・ランプや鈴などといった物も買いました。そして家に急いで戻ると部屋を片付け、シュリー・ラクシュミーの訪れの準備をしました。

その日の日暮れには、マーダヴァは、光輝く女神が立つ彼のプージャーの前にひざまずいていました。

最初に彼は、とても集中し熱意を込めて、マハーラクシュミーへの賛歌である「シュリー・マハーラクシュミヤシュタカム・ストートラム」を歌いました。彼はこう祈りました。「偉大なる女神よ、どうかあなたの祝福を授け、私が求める富を与えてください」

その日以来マーダヴァは毎朝、毎晩マハーラクシュミーのムールティに香油を塗り、新鮮な花で作った花輪を掛け、炎とお香で崇拝し、聖なる賛歌を歌いました。それも1回、それから2回、ついには一度に3回も繰り返すのでした。そしてマーダヴァは、それをするたびに、富を祈りました。

このようにして4年がたちました。その間、宮廷でのマーダヴァの影響力は引き続き大きくなっていきましたが、彼が望む富は全く得られませんでした。なぜか彼の元にやって来る富では、

決して十分ではないのです。お金は彼の指の間から水よりも早くすり抜け、いつももっと必要だと思ったのです。

さらに4年がたつと、マーダヴァは「シュリー・マハーラクシュミー・シュタカム・ストートラム」を夢の中で歌っている自分を見いだしました。シュリー・ラクシュミーの姿は常に彼の心の目に映り、彼の呼吸はそのたびに女神の名前で芳香を漂わせました。いまだに富を祈ってはいたものの、この王の助言者の中では何かが変わりつつあったのです。

今では、マーダヴァは城の庭園を歩いていると、開花しつつあるバラのつぼみの繊細な美しさにくぎ付けになるのです。夏の日暮れにさえずるナイチンゲールの歌は、彼の涙を誘います。日の入りの荘厳な美しさは、彼を完全な平和で包むのです。

何年もの時が過ぎていく間、マーダヴァは毎日マハーラクシュミーの崇拝を続けました。崇拝の神聖な言葉は、舌にネクターが流れるように感じました。彼の心はあまりにも女神で満ちあふれ、他には何も入る余地がありませんでした。宮殿内で起こる権力の駆け引きは浅はかで空虚に感じられました。マーダヴァは王様や王国への圧倒されるほどの忠誠を体験していました。しかしある日、彼は自分の心が別の生活、祈りと奉仕の生活を切望していることに気がつきました。彼は王様に別れを告げるとハンピ山脈へと旅に出て、そこでサンニャーサになる誓いを立て、マーダヴァーナンダ・スワミという僧名を受け取りました。

まさにその翌朝、僧になったばかりの彼が瞑想から目を開けると、そこには完全に神聖な存在がいました。目の前で、完璧なハスの花の上に立つのは、長年祈ってきた女神の輝く姿、昇る朝日のバラ色がかった黄金色に包まれたシュリー・マハーラクシュミーの姿でした。

「ああ、偉大なる女神よ、」と、マーダヴァーナンダは言いました。「あなたの神聖なお姿を目にするとは、なんと驚くべき祝福でしょうか」

「あなたは驚いているのですか」と、女神は彼に尋ねました。「何年もの間、毎日あなたは私の名前を歌っていませんでしたか」

マーダヴァーナンダはこの光景の前にひれ伏し、頭を地面に付け、畏敬の念のあまりに身体全体が震えていました。

「ナマステー、親愛なる忠実なマーダヴァーナンダ」と、マハーラクシュミーは言いました。「あなたは崇拜と献身で私を大いに喜ばせてくれました。私はあなたの願い事を一つかなえてあげようとやって来たのですよ」

マーダヴァーナンダは女神の輝かしい顔をもう一度見上げました。「ああ女神様、ただあなたのダルシャンを持つだけでも、私は誰よりも恩恵を受け祝福されています。他には願いをかなえていただく必要などありません。ただ、どうか、私の無知をお許しいただきたいのです。長年、私は裕福になれるようにとあなたに祈っていました…私は愚かでした。私は、あたかも月に対し一筋の月明りだけを求めていたかのようでした。そのまばゆいばかりの光の中に浸ることができたのに」

シュリー・ラクシュミーはほほ笑みました。「それでも、私はあなたの願い事を一つかなえましょう。望みは何ですか」

マーダヴァーナンダは静かに女神の質問をじっくり考えました。彼は何を望んでいたのでしょうか。彼は世を捨てた身です。もはや富を欲してはいませんでした —— かつて富があれば手に入ると思い願っていた権力も。マーダヴァーナンダはすでにマハーラクシュミーが祝福を十分に授けてくれたと感じました。女神は自然の美しさを教えてくれました。人生の

何気ない美しさに感謝することを教えてくれました。それは、冷たい水のおいしさや、呼吸するという祝福、静けさがもたらす贈り物などです。するとその時、ふと思い付きました…。

「敬愛する女神様、お願いが一つあります。私は大いなる真理の知識が欲しいのです。それがすべての豊かさの中でも最も偉大な豊かさです。あなたの真の姿を見ている今、あなたがすべての知識の源であると知っています。もし私がふさわしいとお思いになるのであれば、この願いをかなえてください。そうすれば、私は自分の人生を懸けて人々の向上のために尽くします」

マハーラクシュミーは優しくほほ笑んで、左手をスワームの頭の上に置きました。「あなたが求めている願い事をかなえましょう。今日からあなたはヴィディヤーラニヤ・スワームとして知られるようになるでしょう」

それは「知識の森」という意味で、ヴィディヤーラニヤ・スワームにはうってつけの名前でした。彼はシュリー・マハーラクシュミーが授けてくれたものを育み、彼の知恵を求めてやってきた数え切れないほどの人々に大いなる真理についての知識を分け与えました。そして彼が書き残した言葉は数世紀にわたり、さらに多くの人々にも読まれ、真理についての知識が分け与えられたのです。

ヴィディヤーラニヤ・スワームは大変敬われた学者であり、アドゥヴァイタ・ヴェーダーンタの哲学についての論文である『パンチャダシー』を記し、さらに、広く認められているアーディ・シャンカラ・チャーリヤの伝記を書きました。



改作: Rashmi Smith
挿絵: Melanie Hall
デザインレイアウト: Jodi Voyevodin